

2019アジア選手権報告書

参加団体名：同志社大学ボート部	
氏名：山本 幸之介	種目：軽量級男子ダブルスカル

1. 大会戦績 9位

(予選6艇中4位 敗者復活5艇中4位 B決勝6艇中3位)

10月24日、初めての海外の地でのレースということもあり、意気込んで臨んだ予選のレース。序盤香港と韓国に大きく出られる。事前にコースのメートル地点と風景をクルーで確認していたものの、漕いでいる最中、1000m地点はまだかゴールはまだかと地点感覚が狂ってしまい理想の体力ペースを保ちづらくなり、船の速度が減速するシーンが多かった。午後の敗者復活戦へ。午後のレースは午前中からの間隔が狭く、休憩がとりづらかったものの、レースが始まると思いのほか体が動き、予選よりは理想のレースプランに近づいた。しかし、韓国、ウズベキスタン、フィリピンに大差をつけられてのゴール。B決勝に回る。

10月27日、初日の日程から2日空いてのレース。2日間の空き日を利用して前レースの反省と課題克服にしっかりと充てる事が出来たのが大きかった。加えて陸上での入念なアップが体の柔軟性や機敏さの向上に繋がり、B決勝は他艇に出遅れる事のない横一線の快調なスタートが決まった。徐々にフィリピンに先頭をリードされ、カザフスタンとの2位争いの展開。1000m付近でレート計が不具合で切れてしまい、ピッチが落ちて水が開き、3位の状態になり、終盤台湾が追い上げてきたが僅差で制し3着でゴール。

今大会の結果は総じてより上の順位をつけれたと感じるものであった。より上の順位と言うよりも、ウズベキスタンに勝ち総合8位を取らなければならなかった。なぜかという、ウズベキスタンは予選の段階では同レースでタイムが2秒差であり、B決勝の場では1000m程までは1秒差だったからである。ボート競技において2秒差の相手は抜き返すことが可能である。私はどのような大会においても圧倒的な力量の差がある相手に勝とうとすることではなく、自分達に近いレベルの相手すべてに勝つことが目標達成の基準点と考えている。つまり今回自分達とおおよそ同じレベルと推測されたウズベキスタンには勝たなければならなかったということである。この大会での反省点は、ウズベキスタンに勝てなかった事。レート計が切れたことでのピッチの乱れもあるが、僅差の相手に勝てる技術、体力はあったのに、それらを極限まで使い勝ち切ろうとする強いマインドが足らなかったという点である。こういった経験を私は今後の人生において忘れることなく活かそうと思う。

2. 今回アジア選手権に出場する事が出来、非常に多くの経験、収穫を得る事が出来た。特に感じたのが、肌の色が違って、どれだけ体型が違ってても、同じボートをしていることを思えば親近感が湧いたことである。最終的には競技を通じて様々な国の人々とコミュニケーションをとるという経験まで出来た。ボートを通じた国際交流ができたことが非常に有意義だった。そして加えて海外の地でボートを漕ぐということ

が私の中での夢であったので、その点においてもとても良い経験ができた。困ったことと言えば、強いて言うならば現地韓国の忠州市では、英語が通じない地域がほとんどだったことである。今後のボート人生において私は、選手としては今大会をもって終えるのだが、今回の諸々の体験を踏まえてさらにこのスポーツが好きになったので、今後もボートを続けようと思った。

以上の点に加えて、自身が今大会の出場選考形態を通じて感じたことを述べる。

日本代表として国外のレースに出場することは多くの人々が経験できることではない。通常の日本代表クルーの選考形態は、エルゴメーターで日本ボート協会の設定した基準値を下回る記録を保持する事、そのうえで水上選考タイムトライアルを踏んでと、複数回の選考過程を踏み選出されるというものである。しかし今回の選考形態のように、全日本選手権に於いて優勝したクルーが選考資格を満たしたものとされ、出場権を得るという選考過程が1段階で完結する事は、一部の卓越した選手だけではなく、より多くのボート選手に出場機会の可能性が広がったことを意味する。自分なりの考えであるが、このことがより日本ボート界の発展に繋がると感じた。なぜなら、決して容易では無いものの、多くの選手に自分でも全日本で優勝すれば、日本代表の名を借り日の丸を背負うことが出来るという思考が生まれると感じたからである。そういった可能性を信じ、頑張る選手が増えることで、全ボート競技者のレベルが向上し、日本のボート競技の発展とともに新たなスター選手がより多く生まれることに繋がりはしないだろうか。そして、この大会で初めて日本代表の名を借りて出場できた選手には、次もまた参加したい、または次は正規の日本代表を志す人も出てくると思われる。これらのことを踏まえると、この選考形態は有意義なものに感じた。この形態がいつから存在したのか自身は詳しく知ってはいないのだが、今後も継続しても良いのではないかと思われた。以上が自身の感想である。

最後に今大会への日本の出漕と詳細を決めて下さった関係者の方々、引率役の中村様、明治安田生命ボート部監督の岩畔様、自身の所属する同志社大学ボート部の監督を初め協力して下さいました。本当に有難うございました。